所報　平成3年9月15日創刊　平成30年8月15日発行・毎月1回15日発行・No. 309
一般社団法人 協同総合研究所 ISSN 1344-7300

協同の發見

きょうどうのはっけん

第309号
2018.8

特集　協同労働運動の質的転換

◎ 田中 羊子　法制化時代、協同労働運動の質的転換と「協同総合福祉拠点（みんなのおうち）」構想について考える～
◎ 今井 一貴　社会連帯活動（こども食堂・おとな食堂）から仕事おこし・みんなのおうち構想へ
◎ 清水 冬樹　子どもが地域につながる自立援助ホームへ
◎ 諸澤 郁子　私たちの「みんなのおうち」構想
◎ 荒井 絵理菜　さんいんみらい事業所の発展を支える方針と実践
◎ 小林 啓示　センター事業団　九州事業本部　小農・森林ワーカーズプロジェクト　報告

■会員ページ（全国新人事務局員紹介）
遠藤 尚志／金 良姫／金 芳未／小髙 拓己／佐藤 信之／鈴木 宏幸／崔 亨珞／山本 侑一郎

■労協若手リーダーのページ
對馬 雄平　これまでの振り返りと今後

■巻頭言
岡安 喜三郎　『誰もが』『自己実現に 自由である』こと

一般社団法人 協同総合研究所
JAPAN INSTITUTE OF CO-OPERATIVE RESEARCH

題字／藤原 桂州

協同の發見

第309号 2018.8

特集　協同労働運動の質的転換

目 次

巻頭言

『誰もが』『自己実現に 自由である』こと …… 2
岡安 喜三郎（協同総合研究所　特任顧問）

特集　協同労働運動の質的転換

- 特集にあたって　利根川 徳（協同総合研究所　専務理事） …… 4
- 法制化時代、協同労働運動の質的転換と「協同総合福祉拠点（みんなのおうち）」構想について考える（第６回協同総研総会記念フォーラム講演より） …… 6
  田中 羊子（センター事業団　理事長）
- 協同総合福祉拠点づくりに向けた旭川地域福祉事業所の取り組み …… 27
  ①社会連帯活動（こども食堂・おとな食堂）から仕事おこし・みんなのおうち構想へ
  今井 一貴（センター事業団　北海道事業本部　道北エリアマネージャー）
  ②子どもが地域につながる自立援助ホームへ
  清水 冬樹（旭川大学短期大学部准教授/会員）
  ③私たちの「みんなのおうち」構想
  諸澤 郁子（センター事業団北海道事業本部　旭川地域福祉事業所）
- さんいんみらい事業所の発展を支える方針と実践 …… 43
  編集：荒井 絵理菜（協同総合研究所　事務局員）
- センター事業団　九州事業本部　小農・森林ワーカーズプロジェクト　報告 …… 63
  小林 啓示（センター事業団熊本出張所　所長/会員）

会員だより（2018年度入団　全国事務局員候補の紹介） …… 84

- 真のフットボーラーなら頭の中の75%は夢が占めているだろう　遠藤 尚志（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- 偶然の出会いから　金 良姫（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- －結び、学び、繋がり－　金 芳未（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- 『どうして働くのか、どうやって働くのか』　小髙 拓己（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- ワーカーズコープに入団して　佐藤 信之（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- ワーカーズ入団のきっかけと抱負　鈴木 宏幸（センター事業団 全国事務局員候補）
- 「協同」から始まる私の未来　崔 亨珞（センター事業団 全国事務局員候補/会員）
- 「自己紹介」　山本 侑一郎（センター事業団 全国事務局員候補/会員）

ワーカーズコープで働く若手リーダーの紹介（Vol.19）

これまでの振り返りと今後 …… 100
對馬 雄平（センター事業団神奈川事業本部　平塚さくら事業所　所長　豊田小学校区放課後児童クラブ）

労協連だより　髙成田 健 …… 105
研究所だより　荒井 絵理菜 …… 106

巻頭言

『誰もが』『自己実現に 自由である』こと

“Everyone” is “free to realize themselves.”

岡安 喜三郎（協同総研特任顧問）

“To be free to realize oneself”（「自己実現に自由であること」）— この言葉は、1976年プエルトリコ・サンファンで開かれた国際福祉会議でヤングハズバンド女史（dame Eileen Younghusband）が社会事業（social service）の目的として定義したもの、と知った。1990年代半ば、同志社大学名誉教授で、元大学生協連会長理事の嶋田啓一郎先生の書かれたコープブックレット（「生協と福祉の思想」1993.9）を読んだときである。

「福祉とは何か」に対する私なりの認識の深化である。それまでは恥ずかしながら、福祉とは、社会的な弱者と言われる人たちに援助の手を差し伸べる政策やそういう活動・事業だくらいにぼんやりと思っていた。『ボーッと生きてんじゃねーよ！』といったところか。これからは、肝心な人たちの主体を中心軸にすることができる。このことから私は、「福祉とは誰もが自己実現に自由であることの実現」「福祉社会とはそういう社会」と、福祉やその事業・現場に対応する出発点にするようにした。

ところで、日本語で「自己実現」というと、様々な説があることがわかる。それは提唱者の原語の違いなのであるが、上記の女史が使ったのは「“self－realization”は人生の究極目標」と唱えたイギリス・オックスフォード大学道徳哲学教授T.H.グリーンの説を引用したとするのが妥当であろう。

一方、「自己実現」という言葉は1990年代に活動している若者の間で良く使われていた。それは、マルクスの言う“Selbstbetätigung”（合目的的自己活動）のことではなさそうである。また、経営学でも使われる有名なマズローの“self－actualization”（欲求５段階説）でも説明しにくい。若者たちは、欲求の各段階を経て「自己実現」を言い出したわけではなく、直接的に自分の願いとして語っていた。社会活動は報酬のためではないから当たり前である。

実は、「自己実現」を自分だけの思いとして説明すれば、マズローの欲求解釈で説明できるが、「社会的」の意味を社会性として自覚するなら、協同の場・人間関係のあり方に拘わる問題となる。欲求の５段階で説明するよりは、もっと明示的に人生の究極目標とした方が、素直に自分自身のこととして引き寄せ

られる。自分の人生課題だとするならば、他の人、誰だって同じ想いを持っていることを容認する共感が鍵になる。そのような思いで人間関係を作ることが、じつは福祉の社会なのではなかろうか、と思うようになった。

ここで、「人生の目標」としたT.H.グリーンでは、「自己実現」とは、自己の素質や能力などを発展させ，より完全な自己を実現していくこと、ということである。「自己実現」提唱者でもあった精神分析学者のユングは、「個性化」の用語を使い、個人に内在する可能性を実現し，人格を完成していくことという言い方をしている。これらは社会との調和で個性化を語っている点で、協同精神に繋がるものである。

◇　◇　◇

さて、これで「福祉とは何か」について、私なりの定義（想いかも知れない）を語ったのであるが、これだけではまだ不十分である。「『自己実現に自由であること』は、誰が享受すべきか」という問題が曖昧になっていては、真の福祉社会は実現しない。

ここで、ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センの言辞が、僭越な言い方ではあるが、私に更なる確認を与えた。センは、人権という点で「自由」は「寛容」も含めて、大切なものであるが、これが仲間内、限定された集団の中での認め合いであるなら、またそうである限り貧困は克服できないと言い切った。貧困の克服には、自由とか寛容は誰もが享受できることが肝要であると語った（集英社新書「貧困の克服」2002.１）。私にとって「誰もが」の明示的自覚である。

実は、我が国の憲法第13条は、「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」と謳っている。

第13条の権利は、人格的生存に必要不可欠な権利・自由を包摂する包括的な権利であり、個別の人権とはいわば一般法と個別法の関係にあり、後者の及ばない範囲をカバーする意味を持つもの（芦田編憲法Ⅱなど）とするのが通説となっているという（有斐閣「憲法Ⅰ」p.271）。

福祉は、包括的に幸福追求権と人格権（個人の人格価値にかかわり、それを侵害されない権利。自己決定権を含む）に、そのあり方の根源があると思われる。私にとって、福祉とは『誰もが』『自己実現に自由である』ことが出発点である。

協同総合研究所は、労働者、市民が自らの力で自律的に仕事と生活の豊かさを求める活動を支援するシンクタンクです。わが国にも「大量失業の時代」が到来する中で、労働者、市民が自主的に仕事おこしをする労働者協同組合（ワーカーズコープ）への注目が増しています。研究所は、わが国唯一の「労働者協同組合」に関する専門研究機関です。

研究活動をネットワークし、蓄積された情報を資源として支援する「協同の發見」を会員のみなさまに毎月お届けいたします。